

【ザ・バロック ―― 江戸の奇才、ヨーロッパの奇才】

A. ファルコニエーリ：3声のためのフォリア

アンドレア・ファルコニエーリは、1639年からナポリ王宮の宮廷楽長を務めた人物。本曲はカンツォーナ第1集（1650年）に含まれる。「フォリア」はイベリア半島起源の舞曲で、16世紀中頃イタリアに広まった。

ヴィヴァルディ：協奏曲《ごしきひわ》

鳥の鳴き声をモチーフにしたユニークな協奏曲。「ごしきひわ」とは、スズメよりもやや小型のカラフルな鳥で、澄んだ声でさえずる。急／緩／急の3楽章構成で、両端楽章では「ごしきひわ」のかまびすしい鳴き声や戯れる様子など、平和な田園風景が描かれている。

J. ファン・エイク：《笛の楽園》より 第115番 ナイチンゲール

ヤコブ・ファン・エイクは17世紀オランダで活躍した盲目の音楽家。《笛の楽園》は140もの旋律を含む大規模な曲集。本曲は1630年代イギリスの歌曲集にあった旋律を用いたという。自由奔放にさえずるナイチンゲールを模写したような可愛らしい小品である。

ラモー：歌劇《優雅なインドの国々》より

1735～36年にかけて完成したラモーの歌劇《優雅なインドの国々》は、舞踏要素が強い作品で、序幕と4つの幕からなる。題名にある「インド」とは、ヨーロッパ以外の国々を指しており、幕ごとに場所もストーリーも異なる。「2つのゼフィーロのエアール」と「花々のエアール」は、ペルシアを舞台にした第3幕「花々、ペルシアの祭」からの2曲で、異国情緒を感じさせる華やかさがある。「ゼフィーロ」とは「西風の神」のことである。

ヴィヴァルディ：協奏曲《夜》

6つの楽章からなる協奏曲《夜》は、ユニークなモチーフを持つ曲で、神秘的な夜を表現している。闇の世界に足を踏み入れるようなラルゴに始まり、幽霊たちが跳梁するプレスト、そして緩／急の楽章を経て、第5楽章ラルゴは「眠り」と題されている。最後はアレグロで、闇の住人たちが押し寄せてくる。

パーセル：歌劇《妖精の女王》より 猿の踊り

パーセルが1695年に死をむかえるまでの5年間は、劇作品に対する情熱があふれ出し、約40曲もの作品を残した。1692年に初演された歌劇《妖精の女王》

は、シェイクスピア『真夏の夜の夢』を原作とした、全5幕・59曲にも及ぶ長大な劇作品。「猿の踊り」は、第5幕の中国庭園の場面で奏される音楽である。

J. ブロウ：狩りのアルマンド

17世紀後半、王政復古期に活躍したイングランドの作曲家・オルガニスト、ジョン・ブロウは、パーセルの師でもあり、その本領は聖歌などの教会音楽だった。アルマンドは「ドイツ風」の意で、バロック音楽では器楽の組曲の第1曲に置かれることが多い。

J. ファン・エイク：《笛の楽園》より 第7番 かわいいマルティーナ

原曲はフランスの初期バロック音楽の作曲家エティエンヌ・ムリニエの宮廷歌曲とされる。世俗的な節回しが加味されて、親しみやすい旋律となっている。主題と2つの変奏からなる。

G. P. E. バッハ：トリオ・ソナタ ヘ長調 H. 588

大バッハの次男カール・フィリップ・エマニュエル・バッハは「ベルリンのバッハ」とも呼ばれ、往時は大バッハをも凌ぐほどの名声を得ていた。楽想豊かで洗練されたその楽曲は、モーツァルトやベートーヴェンにも影響を与えた。本曲は2つのヴァイオリンと通奏低音のための「トリオ・ソナタ ロ短調 H. 587」を、バス・リコーダー、ヴィオラ（またはバスーン）、通奏低音のためのトリオに編曲したもので、1755年に完成している。

ヴィヴァルディ：協奏曲 ヘ長調 RV98 《海の嵐》

「海の嵐」を表現した協奏曲で、急／緩／急の3楽章構成。うねる大波、吹きつける強風、船になだれ込む大量の海水など、嵐に翻弄される様を描き出し、臨場感のある描写が最大の聴きどころ。